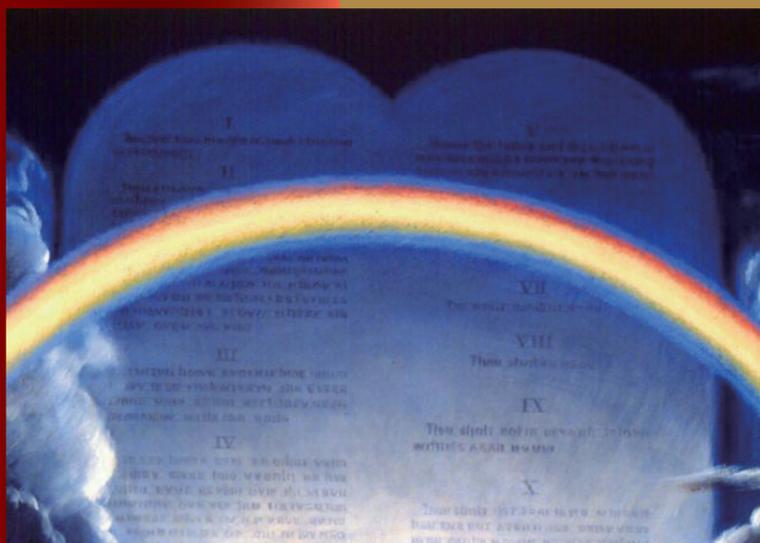


The Ten Commandments

十戒

天と地の義の大基準

Revival Booklet Series No. 14



リバイバルシリーズ No.14

エレン・ホワイト



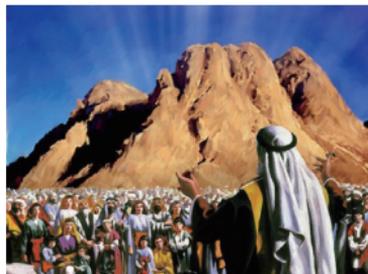
SUNRISE MINISTRY

十戒

シナイに宿営するとまもなく、モーセは神に会うために山へ召された。彼はただ1人でけわしい道を登って行って、主の臨在の場所を示す雲に近づいた。イスラエルは、いま神との親密な、特殊な関係に入れられるのであった。すなわち、彼らは、神の統治下にある1つの教会、1つの国民として統合されるのであった。民のために、モーセに次のような言葉が与えられた。

「あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」(出エジプト 19：4-6)。

モーセは宿営にもどって、イスラエルの長老たちを呼び集め、神の言葉を彼らにくりかえした。彼らは、「われわれは主が言われた



ことを、みな行います」と答えた（同・19：8）。こうして彼らは、神と厳粛な契約を結び、神を彼らの統治者として受け入れることを誓い、これによって、彼らは特別な意味で、神の權威の下にある民となった。

再びモーセは山に登った。主は彼に、「見よ、わたしは濃い雲のうちにあつて、あなたに臨むであろう。それはわたしがあなたと語るのを民に聞かせて、彼らに長くあなたを信じさせるためである」と言われた（同・19：9）。人々は、道中で困難に出会ったとき、モーセとアロンにむかつてつぶやき、イスラエルの群れを滅ぼすためにエジプトから連れ出したのだと言って彼らを責めた。主は、彼らがモーセの教えに信頼するようになるために、彼らの前でモーセに榮譽を与えようと望まれた。

神は、ご自分の律法を語られる時を、その重大性に応じて、荘厳な光景にしようともくろまれた。民は、神への奉仕に関連した1つ1つを最高の尊敬をもってみなければならぬことを印象づけられるのであった。主はモーセに、「あなたは民のところに行って、きょうとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わせ、3日目までに備えさせなさい。3日目に主が、すべての民の目の前で、シナイ山に下るからである」と言われた（同・19：10, 11）。それまでの数日の間に、

すべての者が神の前に出るための厳粛な準備に時間を費やすのであった。彼らの体と衣服は、汚れから清められねばならなかった。そして、モーセが彼らの罪を指摘するとき、彼らは心が不義から清められるように、へりくだって、断食と祈りに専念するのであった。命令されたとおりに準備がなされると、次の命令に従って、モーセは、人も動物も聖域に侵入することがないように、山の周囲に境界を設けるように指示した。もしだれでもあえてその境界に触れるようなことがあれば、たちどころに死の刑罰が下るのであった。

3日目の朝、民のすべての目が山の方へ向けられると、その頂上は濃い雲でおおわれ、それがますます濃く暗くなって下のほうへくだり、ついに全山が暗黒と恐るべき神秘につつまれた。そのとき、ラッパの音が聞こえて民を神との会合に呼び集めたので、モーセは彼らを山のふもとへ導いた。濃い暗黒の中からあざやかなはずまがひらめき、雷鳴が周囲の山々に反響をくりかえした。「シナイ山は全山煙った。主が火のなかであって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた」（同・19：18）。集まった群衆に、「主の栄光は山の頂で、燃える火のように」見えた。そして、「ラッパの音が、いよいよ高くなった」（同・24：17, 19：19）。エホバのご臨在のしるしは恐るべ

きものであったので、イスラエルの群衆は恐ろしさにふるえ、主の前にひれ伏した。モーセさえ、「わたしは恐ろしさのあまり、おののいている」と言った（ヘブル 12：21）。



するとかみなりはやみ、ラッパの音も聞こえず、大地は静かになった。厳粛な沈黙の瞬間があった。そのとき神のみ声が聞こえた。つき従った天使たちに囲まれて、山の上に立たれた主は、ご自身をおおっている濃い暗黒の中から語って、ご自分の律法をお知らせになった。モーセは、その光景を描写してこう言っ

ている。

「主はシナイからこられ、
セイルからわれわれにむかってのぼられ、
パランの山から光を放たれ、
ちよろずの聖者の中からこられた。
その右の手には燃える火があった。
まことに主はその民を愛される。
すべて主に聖別されたものは、
み手のうちにある。

彼らはあなたの足もとに座して、
教をうける」。

(申命記 33 : 2、3)

主は、おそるべき威厳を備えた司法者、立法者としてばかりでなく、憐れみ深い民の守護者として、ご自身をあらわされた。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」(出エジプト 20 : 2)。イスラエル人がすでに自分たちの案内者であり、救済者であると知ったおほかた、彼らをエジプトから連れ出して、海の中に道をつけ、パロとその軍勢を全滅させられたお方、エジプトのどんな神々よりもまさったお方であることを示されたお方—そのお方が、今、ご自分の律法を語られたのである。

律法は、このとき、ヘブル人だけのために語られたのではなかった。神は彼らに栄誉を与えて、ご自分の律法の守護者また遵守者とされたが、それは全世界のための聖なる委託として保持すべきものであった。十戒は、全人類に適用されるのであって、すべての人



の教えと統治のために与えられたのである。十戒は、短くて、簡潔で、権威があって、神と人とに対する人間の義務を網羅し、その全部は愛という根本的な大原則に基づいている。「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」（ルカ 10：27、申命記 6：4, 5、レビ 19：8参照）。十戒の中には、この原則が詳しく定められ、人間の状態と環境に適合されている。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」（出エジプト 20：3）。

永遠に自存し、創造されたお方でなく、自らすべてのものの根源であって維持者であられる主だけが、最高の尊敬と礼拝をお受けになる資格がある。人間は、主以外のなにものをも第1に愛して奉仕することを禁じられている。神に対するわれわれの愛を減少させたり、神に捧げるべき奉仕をさまたげるようなものを心にいだくときに、われわれはそれを自分の神としているのである。

「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造っては

ならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」(同20:4,5)。

第2条は、像や類似した形のものによって真の神を礼拝することを禁じている。多くの異教国民は、自分たちの像は神を礼拝するための象徴にすぎないと主張した。しかし、神はこのような礼拝は罪であると宣言された。物体をもって永遠のお方を象徴しようと試みるときに、神に関する人間の観念は低下するのである。人の心は主の無限の完全さから離れるときに、創造主よりも被造物のほうへひかれるのである。そして神についての観念が低下するにつれて、人間は墮落するのである。

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」(同20:5)。人と神との密接で聖なる関係が、結婚の象徴によってあらわされている。偶像礼拝は靈的姦淫であるから、これに対する神の不快がねたみと呼ばれていることはふさわしい。

「わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし」(同20:5)。子供たちが親の悪行の影響を受けることは避けられないが、その罪にあずからないかぎり、親の不義のために罰せられることはない。しかし、子供はたいてい親の歩いた道を歩くもの

である。遺伝と手本によって、むすこたちは父親の罪にあずかる者となる。肉体的病氣と退化ばかりでなく、悪い傾向、ゆがめられた食欲、墮落した品行が、父から子へ、また、三代四代と受けつがれる。この恐るべき事實は、人間が罪の道に歩くのを抑制する厳肅な力とならねばならない。「わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう」(同 20 : 6)。第 2 条の偽りの神々を礼拝することを禁止することの中には、真の神を礼拝するやうにとの命令が暗に含まれている。神を憎む者に対して怒りが三、四代に及ぶと予告されているのに対して、神への奉仕に忠実な者に対しては、千代まで憐れみが約束されている。

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう」(同 20 : 6)。

この戒めは、偽証や日常のののしりの言葉を禁じているばかりでなく、そのおそるべき意味も考えないで、神のみ名を軽々しく、あるいは不注意に使うことを禁じている。日常の会話において、神について無思慮に発言することや、ささいなことを神に訴えることや、神のみ名を、幾度も無思慮にくりかえすことなどは、神のみ榮えを汚すことになる。「そのみ名は聖にして、

おそれおおい」(詩篇111:9)。神のとうといご品性についての観念が心に印象づけられるように、だれもが、神の尊厳と純潔と神聖さとを冥想すべきである。そして、彼の清いみ名は、うやうやしく厳粛に言わなければならない。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。6日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。7日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は6日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、7日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト20:8-11)。

安息日は、新しい制度として取り入れられたものではなく、創造のときに制定されたものである。それは創造主のみわざの記念としておぼえられ、守られるのである。安息日は、神を天地の創造者としてさし示すことによって、真の神とすべての偽りの神とを区別している。7日目を守る者はだれでも、その行為によって、彼らが主の礼拝者であることを表示するのである。このように、安息日は、この地上において神に仕える者があるかぎり、神に対する人間の忠誠のしるしである。

第4条は、十戒の中で、立法者の名と称号が2つとも
しるされている唯一の戒めである。それは律法がだれ
の權威によって授けられたかを示している唯一の戒め
である。このように第4条は、律法の確実性と拘束力
の証拠としてそれに押された神の印を含んでいる。

神は、人間に、働くために6日間をお与えになり、
彼ら自身の働きがその6日の働き日になされるように
要求される。病人や苦しんでいる者はいつでも世話し
なければならないので、必要とあわれみの行為は安息
日にもゆるされるが、不必要な働きは厳格にこれを避
けなければならない。「安息日にあなたの足をとどめ、
わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの
日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊
んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず」(イ
ザヤ 58 : 13)。禁止はこれだけではない。「むなし
い言葉を語らない」と、預言者イザヤは言っている。
安息日に、商売の話をしたり、商売の計画をたてたり
する者は、神から実際に商売の取引に従事したのと同
じにみなされる。安息日をきよく守るためには、世俗
的なことがらを心に思いめぐらすことさえしてはなら
ない。この戒めには、われわれの門のうちにいるすべ
てのものが含まれている。家の中の同居人は、この清
い時間の間、世俗的な用事をやめるのである。この清
い日には、みんなが1つになって、心からの奉仕によっ

て、神をあがめねばならない。

「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主
が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エ
ジプト 20 : 12)。

親は、ほかのだれも受けることのできない愛情と尊
敬を受ける資格がある。神は、お与えになった子供た
ちの責任を親に負わせられた。そして、子供たちが幼
いころは、親が子供たちに対して、神の立場に立つこ
とを神ご自身が定められた。親の正当な権威を拒む者
は、神の権威を拒んでいる。第5条は、子供たちが親
を尊敬し、親に従順に従うことを要求しているだけで
なく、親を愛し、いたわり、重荷を軽くし、その評判
をまもり、老齢の彼らを助け、慰めることを要求して
いる。それは、また、牧師、統治者その他神が権威を
おゆだねになったすべての人を尊敬するように命じて
いる。

「これが第1の戒めであって、次の約束がそれにつ
いている」と、使徒パウロは言っている(エペソ 6 :
2)。まもなくカナンにはいることを予期していたイス
ラエルにとって、これは、従順な者にとって、その美
しい国で長く生活する保証であった。しかしこれには
もっと広い意味と、神のすべてのイスラエルが含まれ

ていて、地が罪ののろいから解放されたときの永遠の生活が約束されているのである。

「あなたは殺してはならない」(出エジプト 20 : 13)。

命を縮めるすべての不正行為、憎しみとふくしゅうの精神、また、他を傷つける行為を行なわせたり、他が傷つくことを望んだりさせる悪感情を心にいだくこと、(なぜなら、すべて兄弟を憎む者は人殺しだからである)利己的精神をいだいて、貧者や苦しむ者を顧みないこと、健康を害するすべての放縦、また、 unnecessary 消耗、過労に陥ることは、程度の差こそあっても、すべて第6条の違反である。

「あなたは姦淫してはならない」(同・20 : 14)。

この戒めは、不純な行為だけでなく、好色的な思いや欲望、あるいは、そうしたものを刺激する行為を禁止している。外にあらわれた生活だけでなく、ひそかな意図や心の感情においても、純潔が要求される。キリストは神の律法について深遠な義務をお教えになり、邪悪な思いや目つきは、不法な行為と全く同様に罪であると言われた。

「あなたは盗んではならない」(同・20：15)。

この禁止には、公私の罪が含まれている。第8条は、人間をさらったり、奴隷売買をしたりすることを有罪とし、征服のための戦争を禁じている。それは窃盗と強盗を有罪としている。それは日常生活のどんな小さなことながらも厳密な正直さを要求している。それは商売における不正を禁じ、正当な借金や賃金の支払いを要求している。それは、他人の無知、弱点、不幸につけこんで私腹をこやす行為は、すべて天の書に詐欺として記録されることを宣言している。

「あなたは隣人について、偽証してはならない」(同・20：16)。

どんなことにおいても、偽りを言うこと、隣人を欺こうとするすべての試みや意図が、ここに含まれている。欺こうとする意図が虚偽となるのである。目つき、手の動き、顔の表情によって、ことばと同じように効果的にうそが語られるかもしれない。わざと誇張されたしゃべり方、まちがった印象あるいは誇張された印象を伝えるように計画された暗示やほのめかし、事実であっても誤解を招くような言い方などはすべて虚偽である。この戒めは、虚偽や悪意のある憶測や中傷、告げ口などによって隣人の評判を傷つける行為をすべ

て禁じている。事実を故意に隠して、その結果他人に害をおよぼすことは、第9条の違反である。

「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」(同・20：17)。

第10条は、あらゆる罪の根絶をはかるもので、罪の行為が生じる根源の利己的欲望を禁じている。神の律法に従って、他人の所有に対してよこしまな欲望をいだかないものは、同胞に対して悪い行為を犯すことはしないであろう。

かみなりと炎の中で、驚くべき大立法者の権力と威厳のあらわれとともに語られた十戒の清い条文はこのようなものであった。神は、人々がその光景をいつまでも忘れることがないように、また、彼らが律法の創始者、すなわち、天地の創造主に対する深い尊敬心をいだくようになるために、律法の宣布に力と栄光のあらわれが伴うようにされた。神は、また、すべての人々に律法の神聖さ、重要性、永遠性を示そうとされた。

イスラエルの人々は、恐怖に圧倒された。神のおことばの恐るべき力に、彼らのふるえる心は耐えられないように思われた。なぜなら、神の大いなる正義の法

則が、彼らの前に示されたとき、彼らは、聖なる神の御目にうつる罪の憎むべき性格と自分自身の不義を、これまでになかったほどにさとったからである。彼らは恐れおののいて、山から遠く離れて立った。群衆はモーセに叫んで言った。「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従います。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう」。指導者モーセは答えて言った。「恐れてはならない。神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前において、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まれたのである」。しかし、モーセは、「神のおられる濃い雲に近づいて行った」けれども、民は離れたところにとどまっていて、その光景を恐れて見守っていた（同・20：19, 20, 21）。

人々の心は、奴隷生活と偶像礼拝によって盲目になり、墮落していたので、神の10の戒めの深遠な原則を十分に理解する備えができていなかった。人々が十戒の義務をもっと十分に理解し、励行するために、十戒の原則を例示し、適用するための、追加的な戒めが与えられた。これは、かぎりない知恵と公平によって作られ、つかさたちがこれに従ってさばきを行ったので、おきてと呼ばれた。これは十戒とちがって、モーセに個人的に授けられ、モーセはそれを人々に伝えた。



この律法の最初の部分は召使に関するものであった。昔、犯罪人が裁判人によって奴隷として売られることがあった。ある場合には、債務者が債権者によって売られた。貧困のために、自分自身や子供たちを売ることさえあった。しかし、ヘブル人は一生の間奴隷として売られることはなかった。使役の期間は6か年と限られていた。7年目に当人は自由の身となった。人をさらったり、故意に殺害したり、親の権威に反逆すると、死刑の罰を受けた。イスラエル人でない奴隷を保有することはゆるされたが、その生命と身体は嚴重に保護された。奴隷の殺害者は処罰され、主人が奴隷に傷害を加えることは、たとえ1本の歯の損失であっても、その奴隷が自由の身になる権利を与えた。

イスラエル人は、さきごろまで自分たちが奴隷だったので、召使を持てるようになったからといって、彼らは自分たちがエジプト人の監督たちの下で経験してきた、残虐と搾取の精神を持つことがないように気をつけねばならなかった。自分たち自身のにがい奴隷生

活の記憶から、彼らは召使の立場になって考え、親切で憐れみ深く、自分がとり扱われたいと望むように他人をとり扱うことができるようにならねばならなかった。

やもめと孤児の権利は特に保護され、彼らの無力な状態に対するやさしい考慮が命じられた。「もしあなたが彼らを悩まして、彼らがわたしにむかって叫ぶならば、わたしは必ずその叫びを聞くであろう。そしてわたしの怒りは燃えたち、つるぎをもってあなたがたを殺すであろう。あなたがたの妻は寡婦となり、あなたがたの子供たちは孤児となるであろう」と主は宣告された（同 22 : 23, 24）。イスラエルに加わった外国人は、不正と圧制から保護されなければならなかった。「あなたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたがたはエジプトの国で寄留の他国人であったので、寄留の他国人の心を知っているからである」（同 23 : 9）。

貧しい者から利息を取ることが禁示された。貧しい人の上着や毛布を質として取った場合には、日が暮れるまでに返さねばならなかった。盗みの罪を犯した者は倍にして返すことを要求された。つかさたちを尊敬するように命令され、裁判人は虚偽の申し立てに加担したり、わいろをとったりして、裁判を曲げることが

ないように警告された。中傷や悪口は禁止され、個人的な敵に対してさえ、親切な行為をするように命じられた。

人々は再び安息日の聖なる義務を思い起こさせられた。年ごとの祭りが定められ、そのときには、国中の男子はすべて感謝のささげ物と収穫物の初穂をたずさえて主の前に集まるのであった。こうした規則の目的が明らかにされた。それは単なる専横的な主権の発動から出たものではなかった。すべてはイスラエルの益のために与えられたのであった。「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」。すなわち、聖なる神から認められるのにふさわしい者とならねばならないと、主は言われた（同 22 : 31）。

これらの律法は、モーセによって記録されたもので、国家の法律の基礎として、大切に保存すべきものであった。そして、十戒とともに、それを説明するために与えられたこれらも、イスラエルに対する神の約束の成就の条件となるのであった。

そこで、主から民に次の言葉が与えられた。「見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い、彼にそむいて

はならない。わたしの名が彼のうちにあるゆえに、彼はあなたがたのとがをゆるさないであろう。しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語ることを行うならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだとするであろう」（同 23：20－22）。イスラエルの放浪の初めから終わりまで、キリストは、雲と火の柱の中にあって、彼らの指導者となられた。来たるべき救い主をさし示すいろいろな型がある一方では、現実には救い主がそこにおられて、人々のためにモーセに命令を与え、彼らの前に、唯一の祝福の道を示された。山から下ると、「モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、『わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います』（同 24：3）。モーセは、この誓いを、それに従うことを誓った主のみことばとともに、1つの書に記録した。

それから契約の批准が続いた。山のふもとに祭壇が築かれ、そのそばに、民が契約を受け入れた証拠として、「イスラエルの12部族に従って」12の柱が建てられた（同 24：4）。それから、この務めのために選ばれた若者によって、犠牲が捧げられた。

捧げ物の血を祭壇に注いでから、モーセは、「契約の書を取って、これを民に読み聞かせた」（同 24：7）。

こうして、契約の条件が厳粛にくりかえされたが、それでも、それに従うかどうかを選ぶことは自由であった。彼らはまず、神のみ声に従うことを約束したが、それから、神のおきてが宣言されるのを彼らは聞いた。この契約にどれだけのことが含まれているかを彼らがよく認めるように、その原則が詳細に述べられた。ふたたび人々は口をそろえて答えた。「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」（同 24：7）。「モーセが、律法に従ってすべての戒めを民全体に宣言したとき、……血を取って、契約書と民全体とにふりかけ、そして、『これは、神があなたがたに対して立てられた契約の血である』と言った」（ヘブル 9：19, 20）。

いまや、主を王とする選ばれた民の国家の建設の手続きが完全に整った。モーセはすでに次の命令を受けていた。「あなたはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの70人の長老たちと共に、主のもとにのぼってきなさい。そしてあなたがたは遠く離れて礼拝しなさい。ただモーセひとりが主に近づき、他の者は近づいてはならない」（出エジプト 24：1, 2）。人々が山のふもとで礼拝していたときに、これらの選ばれた人々は山へ召された。70人の長老たちがイスラエルを統治するのにモーセを助けることになり、神は彼らにみ霊をそそがれ、神の力と偉大さを彼らにおみせに

なった。「そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった」（同 24 : 10）。彼らは神を見たのではなく、そのご臨在の栄光を見たのであった。これより以前には、彼らはこのような光景に耐えることができなかつた。しかし、神の力のあらわれに、彼らは恐れ、悔い改めていた。彼らは、神の栄光、純潔、憐れみを瞑想し、ついに彼らの瞑想の主題である神にいっそう近づくことができた。

モーセとその従者ヨシュアは、今神に会うために召された。彼らがしばらく不在になるので、モーセは、アロンとホルを任命して自分の代理とし、彼らを助ける長老たちも任命した。「こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。

主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は6日のあいだ、山をおおっていた」（同 24 : 15, 16）。6日の間、雲は、神の特別な臨在のしるしとして山をおおっていた。しかし、神ご自身のあらわれや神のみこころの伝達はなかつた。この期間、モーセは、至高者であられる神の謁見室へ呼ばれるのを待っていた。彼は、「山に登り、わたしの所に来て、そこにいなさい」と命じられていた（同・24 : 12）。彼の忍耐と服従心がためされたけれども、彼は忍耐して待ち続け、自

分の立場を離れなかった。この待っている期間が彼にとっては準備の時、自己吟味の時であった。神に愛されたこのしもべさえ、直ちに、神のご臨在に近づいて行って、その栄光のあらわれに耐えることはできなかった。創造主と直接に交わる備えができる前に、心をさぐり、瞑想と祈りによって、神に献身するのに6日間を用いなければならなかった。

7日目に、それは安息日であったが、モーセは雲の中へ召された。濃い雲が、全イスラエルの目の前で開け、主の栄光が燃える火のように輝き出た。「モーセは雲の中にはいって、山に登った。そしてモーセは40日40夜、山にいた」(同・24:18)。山における40日間の滞在には、準備の6日間は含まれていなかった。6日の間、ヨシュアはモーセと共にいて、彼らは共にマナを食べ、「山から流れ下る谷川」から飲んだ(申命記9:21)。しかし、ヨシュアはモーセと一緒に雲の中に入らなかった。彼は外に残って、モーセの帰りを待っている間、毎日食べ、かつ飲んでいた。しかし、モーセは、40日の間ずっと断食した。

モーセは、山にいた間に、神のご臨在が特別にあらわされる聖所の建築について指示を受けた。「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい」というのが神の命令であった。3度、安息日の遵守が命令された。「これ

は永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。……わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。……すべてこの日に仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう」（出エジプト 25：8, 31：17, 13, 14）。神への奉仕のために、幕屋をすぐに建てるようにとの命令が与えられたばかりであった。そしていま、彼らの念頭にある目的は神の栄光であり、また礼拝の場所が非常に必要であるために、彼らは、安息日に建築のために働いてもよいと考えるかもしれなかった。この誤りを犯さないようにするために、注意が与えられた。神のための特別な働きがどんなに神聖であり、急を要しても、神の清い安息日を破ってはならなかった。

これから、人々は彼らの王であられるおかたに臨在していただくのであった。「わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう」。幕屋で「わたしはイスラエルの人々に会うであろう」というのがモーセに与えられた保証であった（同・29：45, 43）。神の権威の象徴として、また神のみこころのあらわれとして、



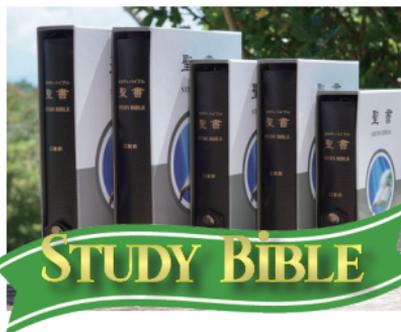
神ご自身の指で2枚の石の板に刻まれた十戒の写しがモーセに渡されたが、それは聖所に納められて、国民の礼拝の目に見える中心となるのであった（申命記 9：10、出エジプト 32：15, 16 参照）。

イスラエルは奴隷の境遇から、すべての民にまさって高められ、王の王であられるおかたの特別な宝とされた。神は、彼らに聖なる委託物をゆだねるために、彼らを世から引き離された。神は彼らを律法の保管者とし、彼らによって神ご自身の知識を人々の中に保とうと望まれた。こうして天の光は、暗黒につつまれている世を照らし、すべての民族に偶像礼拝から離れて、生きた神に仕えるようにと訴えられる声が聞かれなければならなかった。もし、イスラエル人が、彼らの委託に忠実であるなら、彼らはこの世で強力な国家となるのである。神は彼らを防衛し、彼らを他のどの国民よりも高められるのである。神の光と真理は、彼らを通してあらわされ、彼らは、あらゆる種類の偶像礼拝



にまさって、神の礼拝のすぐれていることのよい例として異彩をはなつのであった。

もっと詳しく研究なされたい方のために...



スタディバイブル

口語訳・注解・
脚注引照付き・地図
チャート・聖句索引

¥8,000～

色はすべて黒で本革を使用

宇宙の謎、地球の謎、人生の謎に真実の解決を与えるのは聖書だけです。スタディバイブルは自分で研究できるように編集されています。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

十戒 -リバイバルシリーズ-

※頒布価格 100 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日
著者 エレン・ホワイト
発行所 サンライズミニストリー
〒 905-0428
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471
電話 0980-56-2783
FAX 0980-56-2881
Email info@sunriseministry.com
www.sunriseministry.com



リバイバル小冊子シリーズ

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No. 10 預言の霊に関する指導原理

No. 11 サタンのわな

No. 12 人類が直面している世界情勢

No. 13 田舎の生活

No. 14 十戒

No. 15 主のぶどう園

No. 16 背教のアルファ

No. 17 終わりの時に備えよ

No. 18 どのようにして安息日を守るのか

No. 19 キリスト論

No. 20 救いの確証

No. 21 もうひとつの箱船

